

青い目のドロシー

作 津島次温

登場人物

昭和十八年

森嶋ハル(26歳) 国民学校初等科教師

園田秋子(26歳) 国民学校初等科教師

蒲生キチ(27歳) 国民学校初等科教師

沖(46歳) 国民学校校長

昭和五十二年

末永(23歳) 寺坂静子の娘

森嶋ハル(60歳)

寺坂静子(14歳) ハルの教え子

終業のチャイムが鳴る。下校する子供たちがにぎやかに教室から出てくる。

ハル（60歳）「（子供たちに）みなさん、さようなら。」

ほら、タケシ君、廊下は走っちゃ駄目よ」

ハルは子供たちを眺めて、笑う。

応接室の扉が開く。ハルが入ってくる。

ハル「失礼します」

末永「あ、森嶋先生。森嶋ハル先生ですか？」

ハル「はい。私が森嶋です」

末永「はじめまして。末永と申します」

ハル「末永さん、ですか。はじめまして。すみませんね、

お待たせしちゃって」

末永「いえ、大丈夫です。今、授業が終わったんですか？」

ハル「はい。この歳になると、さすがに六時間目まで受

け持つのは大変ね」

末永「あの、失礼ですが、先生はおいくつでいらつしや

いますか？」

ハル「今年で六十です」

末永「六十歳」

ハル「びっくりするでしょう。こんなおばあちゃんが現

役で教師をしているなんて」

末永「いえ、そんなこと。でも、良かった。私が想像していた通りの先生みたいだから」

ハル「え？」

末永「あ、すみません。私、まだこちらへ伺った理由を説明していませんでしたよね」

ハル「ええ」

末永「先生、これを見ていただだけませんか」

末永は持って来た大きな箱を指さす。

ハル「大きな箱。これは何が入っているんですか？」

末永「開けてみてください」

ハル「ええ」

ハルは訝しげに箱を開く。箱の中から青い目の人

形ドロシーが出てくる。

ドロシーを見て、ハルが驚く。

ハル「これは、ドロシー」

末永「覚えていらっしやいますか？」

ハル「ええ。もちろんですとも。ずうっと、探していたんですから。ドロシー、あなた、無事だったのね」

末永「良かった。やっぱりこの学校がこの子のおうちだったんだ」

ハル「末永さん、何故あなたがこの人形を？」

末永「森嶋先生、教えていただけませんか？」

ハル「え？」

末永「私、この人形のことを知りたくて、今日、ここへ来たんです。この人形は先生にとって大切なものなんですか？」

ハル「ええ、ドロシーは私の人生そのもの」

末永「お話を聞かせてもらってもいいですか？」

ハルは少女時代のことから、記憶をたどり始める。

ハル「あれは昭和二年のことでした。私は十歳になったばかりで、小学校、あの頃は尋常小学校って言いましてけど、四年生でした。その年、私たちの学校にアメリカから青い目の人形が贈られてきました」

沖(30歳)「この子は人形の姿をしています、アメリカからやってきた、みなさんのお友達です。名前はドロシーといいます」

ハル「当時、アメリカにはたくさんの日本人が移民していました。けれどアメリカ人は日本人を嫌っていました。日本人は真面目だし、少々お給料が安くても一所懸命働くでしょう。だから日本人に仕事を取られてしまいうアメリカ人がたくさん居たんです。だけどそんな時代でも、差別はよくない、人は皆仲良くするべきだって唱えるアメリカ人もいた。そういう人たちが思いついたんです。この差別の芽を摘むことができるのは子供たちだ。アメリカと日本の子供たちの間に友情を育てることが大切だって。ドロシーはその友情の証として、アメリカからやって来たんです。ドロシーを初めて見たとき、『なんてかわいい人形なの』って、私はドキドキしました。だって、私はそれまで黒

髪の日本人形しか見たことが無かったんですよ。ドロシーの髪は金髪で、きれいな青い目をしていました。先生がドロシーを抱き上げると『ママア』ってしゃべったんです。私は、ドロシーは人形ではなくて、アメリカからやって来た本物の友達なんだって、あの時の興奮は、こうやって話していると今でも思い出せます」

沖「アメリカは太平洋を挟んだずっと向うにある国です。けれども、アメリカの子供たちはみなさんと仲良くなりたい、友達になりたいと思ってこの人形を贈ってくれたのです。この前、修身の授業で習いましたね。国と国が仲良くすることを『国交を結ぶ』と言います。ドロシーは日本とアメリカが国交を結んでいるしるしです。みなさん、ドロシーを大切にしてくださいね」

ハル「『はい！』って、私は大きく返事しました。私は校舎の中に飾られたドロシーに毎日会いに行きました。そして、アメリカがどんな国なのか想像しては憧れを膨らませました。大人になったらドロシーを連れてアメリカへ行く。そしてアメリカにたくさんの友達を作る。それが私の夢になりました。本気だったんですよ。アメリカに行くお金を貯めようと思って、親に内緒で

靴磨きの仕事をしたりしていたんですから」

ハル「アメリカに対する憧れはだんだん大きくなってきました。私が卒業した後も子供たちがドロシーを大切にしてくれるとうれしいな。私も先生になって、子供たちに国交を結ぶことの大切さを教えたいな。そう考えて、私は女子師範学校に進みました。ところが、」

ハル「私が師範学校で学んでいたころ、日本は中国と戦争をしていました。私が子供だった頃の世界からは何かが変わってきている。それはぼんやりと感じていました。それから師範学校を卒業して小学校の教員になり、私は母校の尋常小学校に赴任しました。ドロシーはまだ職員室の前に飾られていました。しかし赴任から数年後の昭和十六年のことでした」

ハル「尋常小学校は国民学校と名前が変わりました。そしてその年、日本とアメリカの戦争が始まったんです」

子供たちの行進する足音が響く。

蒲生(27歳)「(笛の号令)みんな、しっかり足を上げて、背筋を伸ばす。(笛)こら！伸二！列を乱すな！」

ハル「『挙国一致』『特別攻撃隊』『国民皆兵』……。

教科書の中には戦争を賛美する勇ましい言葉が溢れていました」

秋子(26歳)「大東亜戦争が始まって以来、世界には明るい大きな希望が湧いてきました。アメリカとイギリスは、それを邪魔する敵です。私たちは新しい世界を作るために、皆が協力してこれらの敵と戦わなければなりません」

ハル「アメリカは敵だ。私たち教員は子供たちにそう教えなければならなくなりました。ドロシーはアメリカの人形です。飾っておくことはできなくなり、職員室の棚の中に片づけられました。私はアメリカとの友情を深めることを教えたくて教員になったのです。けれども、学校はともそんなことが語れる場所ではなくなっていました。お国のために協力しなければなら

い。それも分かっていた。それでも私は国と国との友情について語ることが諦められなくて、それをどうやったら授業に取り入れられるか、どうすればドロシーをもう一度学校の中に飾ることができるのか、そのことをいつも考えていたのです。そして、あれは昭和十八年のことでした」

ハルがドロシーを柵から出す。

ハル(26歳)「久しぶりね、ドロシー。さみしかったでしょう」

沖(46歳)「森嶋先生、」

ハル「あ、校長先生」

沖「授業、お疲れさまです。おや？ドロシーじゃないですか。何故それを？」

ハル「ドロシーを授業に使おうと思うんです」

沖「授業に？」

ハル「将来のことを子供たちと考えたいと思うんです」

沖「将来を考える？」

ハル「戦争はいつか終わります。そうすれば、アメリカやイギリスとの国交はまた回復するはずです。そのと

き私たちは彼らとどう向き合うべきか。それを子供たちに考えてもらおう授業をしようと思います」

沖「その授業にドロシーを？」

ハル「はい。アメリカと日本の仲が良かった時代があったことを、このドロシーを使って子供たちに話したいんです。そして、いつか戦争が終わったとき、子供たちがもう一度アメリカ人と、」

沖「森嶋先生」

ハル「はい？」

沖「それは国が定めた指導要目に従った授業ですか？」

ハル「それは……」

沖「あなたは自分の価値観を持っていて、いつも新しい試みをしてみようとする。それは素晴らしいことだと思います。しかし、私たちの仕事は国の要目に従って子供たちを教育することです。それをはみ出すようなことは止しましょう」

ハル「でも私は、戦争が終わった後のことも子供たちに考えてもらいたいって思うんです」

沖「あなたの考えは、今は早すぎます」

ハル「校長先生、」

沖「ドロシーは片づけておいてください」

ハル「沖先生！」

沖「え？」

ハル「私が小学生のとき、この人形を前にしてアメリカとの友情について話してくださったのは、沖先生、あなたでした。私はその話をずっと大切にしてい、そして教員になったんです」

沖「森嶋先生の思いが理解される日は、またいつか来るかもしれませんが。ですが、今は我慢するべきです」

沖が職員室を出ていく。

ハルはドロシーを片づけようと棚の扉を開く。そ

こへ秋子が職員室に入ってくる。

秋子「はー、疲れた。あら、ハルちゃん」

ハル「あ、アキちゃん。お疲れさま」

秋子「どうしたの？その人形」

ハル「うん。授業で子供たちに見せようと思ったんだけど、」

秋子「子供たちに？」

ハル「うん。でも、校長先生に止められた」

秋子「そう」

ハル「仕方がないね」

秋子「どうしてその人形を子供たちに見せようと思ったの？」

ハル「将来のことを考えてほしくて」

秋子「将来？」

ハル「そう。戦争が終わったずっと先のこと。今は戦争をしていても、またいつかアメリカの人たちと仲良くなれる日が来るかもしれないじゃない」

秋子「ハルちゃん、そんなことを考えていたの」

ハル「あんまり、こんなことは言わない方が良いんだよね、本当は」

秋子「そうね。でもハルちゃんはすごいね。戦争後の世界なんて。私は考えたこともない。今の自分のことで精いっぱい、」

ハル「それが普通だよ。私の方が変わってるんだと思う。」

今はお国のために何ができるかを考えるべきなのね」

秋子「そうだね。……ハルちゃん、」

ハル「何？」

秋子「竹井君のことだけど、」

ハル「え？」

秋子「容体はどう？」

ハル「知ってたの？私が竹井君の家に通っていること」

秋子「……うん」

ハル「そうか。うん。どう言えばいいのかな。元氣って

いう言葉はまったく違うと思うんだけど、ようやく、

気持ち落ち着いてきたみたいで」

秋子「そうなんだ。ハルちゃん、」

ハル「何？」

秋子「ううん。何でもない」

ハル「そう？」

職員室の扉が開く。蒲生が入ってくる。

秋子「あ、蒲生先生」

ハル「お疲れ様です」

蒲生「お疲れ様です。（秋子に目を向け）園田先生」

秋子「はい」

蒲生「園田先生は教練の手を抜いていませんか？」

秋子「え？」

蒲生「先生の学級の子供たちはまとまりがありません。

行進ひとつできないようでは、将来お国のために戦え

ません」

秋子「いえ、私はちゃんと教えているつもりで……」

蒲生「昨日、田村君たちは奉安殿の前を素通りして帰っ

ていきました」

秋子「え、」

蒲生「奉安殿は天皇、皇后両陛下の御影を祀ってある大
事な場所です。その前を拝礼もせずに通り過ぎたんで

す」

秋子「すみません」

蒲生「もっとしっかりと教えてくださいね」

ハル「園田先生はがんばってます。ほとんど女性教員し

かないこの学校で、男子学生の教練も一生懸命勤め

ています。男子が奉安殿の前で拝礼を忘れるのは、遊

びに夢中になっている時にはよくあることです」

蒲生「森嶋先生、あなたの学級の生徒も気が緩んでいま

すよ。寺坂静子さんなんて、教練の時間はほとんど見

学しているじゃないですか」

ハル「寺坂さんは優秀な子です。国語も社会も学級で一

番成績が良いんです」

蒲生「成績だけでは駄目なんです。もっと子供たちの精神を鍛えてください」

ハル「精神って、」

蒲生「分かっているでしょう。戦局はどんどん苦しくなっているんです。この学校にも志願兵を募るよう指示が来ています。お二人の学級の生徒たちは皆いつか戦地に立つことになります。もしも本土で戦うようなことがあれば、女子だって竹やりを持って戦わなければなりません。その生徒たちが立派に戦えるように鍛えることが私たち教員の仕事です」

ハル「それは分かっています」

蒲生「なら、先生たち自身がしっかりしてください」

蒲生がドロシーに気づく。

蒲生「ん？青い目……その人形は、」

ハル「あ、この子、授業で使おうと思ったんですけど、校長先生に止められたので片づけようとしていたところですよ」

蒲生「ちょうど良かった。構いません。そこに置いてお

いてください」

ハル「何故ですか？」

蒲生「その人形を処分します」

ハル「え？」

蒲生「いえ、処分ではないですね。処刑です」

ハル「処刑？」

秋子「どういうことですか？」

蒲生「言葉の通りです。その人形はアメリカから来た敵性人形です。そんなものを学校に置いておくわけには

いきません。だから処分するんです」

ハル「処刑って、どういう意味ですか？」

蒲生「竹やりで突き壊すか、みんなで踏みつぶすか、ル

ーズベルトの似顔絵と一緒に火にかけるか」

ハル「やめてください！なんて恐ろしいことを言うんですか」

蒲生「そうでしょうか？普段、私たちが教えていることと何が違うのですか？」

ハル「人形は敵兵ではありません。それにドロシーは女の子ですよ。それを竹やりで突くだなんて。子供たちにそんなことをさせられません」

蒲生「子供たちが望んでいるんです」

ハル「え？」

蒲生「今朝の新聞を読みましたか？青森県の国民学校の生徒たちが青い目の人形を処分したことが紹介されています。私の学級の生徒がその記事を読んで私に申し出たんです。自分たちも同じことがしたいと」

ハル「そんな、」

蒲生「今から校長先生にお願いに行ってきます。人形はそのまま出しておいてください」

ハル「待ってください」

蒲生「何ですか？」

ハル「どれくらいの生徒が処分に賛成しているんですか？」

蒲生「全員です」

ハル「まさか」

蒲生「処分に賛成なら挙手するように言いました。そうしたら全員が手を挙げたんです」

ハル「キクちゃんは？キクちゃんも手を挙げたんですか？あの子はとてもやさしい子で、人形をやりで突くなんてできる子じゃない」

蒲生「手を挙げました」

ハル「そんな」

蒲生「森嶋先生、あなたは処刑に反対なんですか？」

ハル「処刑なんて言い方、やめてください」

蒲生「じゃあ、何て言えばいいんです？」

ハル「（言葉に詰まる）私は、ドロシーを保存するべき

だと思っています」

蒲生「保存？」

ハル「ドロシーはアメリカとの戦争が始まる前からこの学校に居ました。この子がここに居る理由を子供たちに教えるべきです。そして、いつか戦争が終わったときにはアメリカ人とまた仲良くするべきだと子供たちに伝えたいんです。処刑だなんて、ドロシーには何の罪も無いじゃないですか」

蒲生「アメリカから来たということが罪なんです。レコード……いえ音盤も、本も映画も、アメリカのものはみんな処分されている。その人形だって例外ではありません」

ハル「蒲生先生だって、私や園田先生と同じように、子供の頃に青い目の人形を学校で見ていたはずですよ。あ

の頃の小学校を知っているはずです。それなら、アメリカとの友情を育てることの大切さも学んだんじゃないんですか？」

蒲生「森嶋先生、先生が何を考えようと勝手ですが、言動には注意をした方が良くと思います」

ハル「私は、自分が正しいと思うことは口に出して伝えます」

蒲生「それは間違いです。考えるだけなら好きにすればいい。でも声に出さないでください。あなただけの問題ではなくってしまうから」

ハル「戦争の後のことを語るのは、悪いことなんですか？」

蒲生「指導要目の域を超えてしまっていると思います。

戦争の後のことを考えるのは、私たちではなく天皇陛下です。そうですね、園田先生」

秋子「え？」

蒲生「あなたも今の学校に違和感を覚えるのですか？」

秋子「いえ、私は……」

蒲生「そもそも戦争が終わったからといってアメリカとの関係が元に戻るなんてあまりにも幼稚な考えです。

戦地ではたくさんの日本の兵隊さんが名誉の戦死を遂

げています。その亡くなられた兵隊さんの家族にとつてアメリカ人は仇です。逆の立場に立てば、日本もたくさんのアメリカ兵を殺しています。彼らの家族からすれば私たち日本人は仇です。そんな国同士が仲良くなれるものでしょうか」

ハル「それを子供たちに託すんです」

蒲生「森嶋先生はまるで現実を見ていらっしやらない」

ハル「考えれば答えは見つかるって信じてるんです」

蒲生「あなたは知らないんです。家族を戦争で失うことの苦しさを」

ハル「そんなことない。私にだって分かります」

蒲生「あなたは誰かを失ったんですか？」

ハル「そうです。私は、……いえ、」

蒲生「もしそうだとしたら憎くないんですか？アメリカ

人が」

ハル「私は……」

秋子「ハルちゃん」

沖校長が職員室に入ってくる。

沖「皆さん、少し落ち着きましょう」

ハル「校長先生」

蒲生「校長先生、ちょうど良いところに来てくれました。

この人形の処分についてお願いがあります」

ハル「蒲生先生、ちょっと待ってください」

沖「まあ二人とも落ち着いて。話は聞こえていましたから。校長室の扉はそんなに分厚くないですからね」

蒲生「それならお分かりですね。子供たちからあの人形を処分したいという声が上がっています。許可をいただけますね」

沖「森嶋先生は処分に反対なのですね」

ハル「はい。青い目をしているというだけでドロシーを

仇のように考えるのは間違いだと思います」

蒲生「いい加減にしてください。日本とアメリカが友情を取り戻すなんて、百年待っても有り得ないことです」

沖「まあ待ってください。園田先生、」

秋子「はい」

沖「先生はどう考えているのですか？」

秋子「私は……（答えに詰まる）」

沖「分かりました。蒲生先生と森嶋先生が論争を続けても、このままじゃあ解決はしないでしょう。どうでし

よう。この件は私の方で預らせてもらえませんか」

蒲生「どうなさるおつもりですか？」

沖「ええ。明日までに私の考えをまとめます。そして、

私の出した答えに従っていただきたい」

蒲生「今、校長先生はどうお考えなんですか？処分すべ

きか、保存すべきか」

沖「今の私の意見を話すのは控えます。明日、はっきり
と決めてからお伝えします」

蒲生「それは乱暴じゃありませんか。もしそれで保存す
ると言われても、私は納得できません」

ハル「私もそれは蒲生先生と同じ意見です」

蒲生「今、ここで話し合うべきです」

沖「分かりました。それじゃあここで結論を出しましよ
う。そのために私自身の考えを整理したい。どうでし
よう。ひとりずつ私に意見を聞かせてもらえませんか？」

蒲生「分かりました」

ハル「校長先生のご意見も是非お聞きしたいですから」

沖「それでは、ひとりずつ、校長室でお話ししましょう。

まずは、蒲生先生から」